

同時刊行!

鷺見定信 仏教と民俗の歳時記

編集代表 武田道生
淑徳大学准教授

本書は、故鷺見定信先生が、昭和五十八年一月から十二月までの一年間にわたって、月刊誌『浄土』（法然上人顕仰会発行）に掲載された「仏教と民俗」をまとめたものである。平成二十一年二月十九日、鷺見先生は六十五回目の誕生日に急逝された。ようやく表葬儀を終えた後、私どもが大学で教えを受けた後輩が大きな喪失のなかにいるとき、鷺見先生の恩師に当たる、大正大学名誉教授で浄土宗鎌倉大本山光明寺宮林昭彦大僧正台下を中心に鷺見先生の遺稿集を刊行しようではないか、いやしくなくては、という声があがった。

『鷺見定信遺稿論文集 仏教と民俗』と対をなすものである。が、学術研修論文ではなく、一般読者に向けて書かれたものであるため、手に取りやすいよう、装幀や版を変えた。

本書の内容は、一般読者を対象として書かれてはいるものの、今回編集に際して、改めて読み直してみると、毎月の行事に関して、その造詣の深さと幅広さ、欧米の資料、先生の専門であった宗教学、文化人類学、民俗学からの視点など、よくこれだけの内容をこの紙数に納めたものだと感じ入った。そこで、本書を編集するに当たって、文章には、わかりやすいように註や出典、一般には難解な用語の解説を付け加えた。さらに、写真や図版を各月ごとに数多く入れることで、より理解しやすい内容を心がけた。

なお、掲載した写真については主に、宗教民俗と新宗教を専門とするプロカメラマンの藤田庄市氏の作品である。



四六判・総頁一八〇 定価一五七五円
（「あとがき」より抜粋）

目次

仏教と民俗―はじめに

正月の行事 一ツ火と修正会

二月の行事 その一 節分の鬼―追儺と豆まき
その二 針供養

三月の行事 彼岸会

四月の行事 花まつり―灌仏会と卯月八日

五月の行事 端午の節句と来迎会

六月の行事 御霊会と施餓鬼会

七月の行事 七夕と七日益

八月の行事 盆と盆踊り

九月の行事 大光院開山忌と呑竜信仰

十月の行事 十夜法要

十一月の行事 冬至と大師講

十二月の行事 仏名会



ご注文は▶ ノンブル社 〒169-0051 東京都新宿区西早稲田 1-8-22-2F 電話 03-3203-3357
fax 03-3203-2156 (24 時間対応) Email : otayori@nonburusha.co.jp

目次

I 十夜法要と民俗

浄土宗の十夜法要―とくに神奈川の場合
十夜講と十夜法要

II 仏教文学にみる夢と往生

今昔物語集附本朝仏法部の夢について
往生伝の夢
夢と浄土願生者
持経者譚の構造―『今昔物語集』をとおして

III 仏教民俗の現在

村落における仏教寺院と念仏講
講の成立と展開―呑竜講の場合
香岐の念仏講
民俗信仰の再生と供養儀礼

IV 日本仏教のハワイ・北米開教

ハワイ浄土宗信徒の生活と意識
北米浄土宗信徒の生活と意識
明治期のハワイ開教
『開教区記録』にみられたハワイ浄土宗
ハワイ浄土宗と日本語学校
ハワイ浄土宗とアメリカ化をめぐる
海外に展開するハワイ仏教の現状
ハワイ日系三世と仏教
―『ハワイ日系人の生活と信仰』の調査から

V 浄土教のアジア開教

浄土宗の台湾布教―明治期をとおして
明治期浄土宗の韓国布教
―主に三隅田持門の布教をとおして

VI 現代における仏教と葬送の変容

沖縄における死者慣行の変容と仏教
アンケート調査でみる葬式と家族

The Issei and Jōdo Denomination in Hawaii during the 1920's: Research from the "Propagation Records"

A5判/上製/箱入/総頁416頁 定価10,290円

仏教と民俗

鷺見定信遺稿論文集

題字 宮林昭彦
大本山光明寺
第百十二世法主

刊行辞 伊藤唯眞
追悼の言葉 宮林昭彦
あとがき 星野英紀

鷺見定信遺稿論文集刊行会 編 ノンブル社

伊藤 唯眞

浄土門主・総本山知恩院門跡

□ 鷲見定信先生と私が昵懇になったのは、浄土宗総合研究所に新たに研究プロジェクト「葬祭仏教研究班」が平成五年十月に結成され、その研究のため足繁く東西を往来するようになってからである。

□ 「葬祭仏教」には強い関心を寄せられ、研究会が本格的に始動する前段階から、葬祭仏教に関する文献を集めたり、研究の構想大綱をプリントするなど協力を惜しまれなかった。スムーズな発足ができたのは鷲見先生のお陰である。浄土宗総合研究所の場合、重源ばかりに云えば「支度第一の鷲見先生」であった。

□ 浄土宗総合研究所が「葬祭仏教」を研究プロジェクトに取り上げたのは画期的なことであった。現今、教団の実相を把握する上で極めて正当な研究課題であった。研究に当たった人々も専攻が教学、法式、宗教学、社会学、民俗学と多方面に亘っていたのも当然なことであった。第一次の「葬祭研究」の成果をノンブル社から公刊した時に、私はこの研究を「葬祭学事始め」と称したが、僚友・鷲見先生も同じ思いであられたであろう。当時、散骨が問題とされ、家と祭礼、戒名の

問題など世間ではいろんな意見が続出していた。そんな時、教義と葬制の乖離が古くして新しい問題として世上に生起していた。それは仏教と民間受容の問題という極めて民俗学上の課題ともなっていた。

□ 鷲見先生の遺稿集には仏教民俗にかかるとして、「十夜法要と民俗」篇で、「浄土宗の十夜法要」とくに神奈川の場合」と「十夜講と十夜法要」の二論文が収載されている。前者は神奈川光明寺、旧末寺が多い三浦半島を中心に、後者では福岡の事例を多く取り上げられている。ともに寺院における儀礼構造を現行と文献による再現で、先ず寺院内部での十夜法要の特色を双盤、誦論文、塔婆など、また引声念仏、引声阿弥陀經の行道などに求め、また九州地方の十夜米のお供へは死者が出た家よりも地域の人々が施主となって新亡供養を行ったり、また善の綱には妊婦が安産を願って取りあうといった民俗的行事が付着しているという。先生は九州地方の事例を多く蒐集されているので後進には有難いことである。亡失の事例も多かるうから貴重である。
(「刊行辞」より抜粋)

宮林 昭彦

大本山光明寺第一百二世 法主

□ 鷲見定信先生との出会いは、大正大学に入学された昭和三十八年のときからであります。専攻は宗教学でしたが、仏教学をよく聴講され、仏教の教理より仏教行事について調査研究されたことを思い出します。終生研究専門の分野は、とくに仏教民俗学であり、民間に伝承された宗教文化儀礼等の諸相の研究においては新分野を拓かれ将来の研究に対しても大いに期待をされたものでした。

□ 思えば先生は昭和二十年二月十九日、神奈川県茅ヶ崎、浄土宗の梅雲寺に鷲見立信上人を師父として生を享け、仏縁深く育てられました。先代立信上人は、とくに法儀に卓越して、光明寺の十夜法要の回向師、誦論文十夜の先達者であられました。先生が十夜法要をのちの専門分野から学問的に解明を心懸けられたのも、仏飯を食まれた因縁によるものとも思われます。

□ 光明寺の十夜法要は歴史的には慈覚大師円仁によって中国より我が国の天台真如堂に伝承され、当山第九世観誓祐崇上人によって浄土宗十夜法要の始まりとされ、十日十夜別時念仏を行い、しかも引声阿弥陀經、殷々と響

く双盤、引声念仏は独特の儀式作法が行ぜられ感動を与えるものであります。「真如堂縁起」や「十夜念佛縁起」について教義儀式に関しては幾多の研究がなされていますが、未だ仏教行事と民間信仰との接点と、儀礼構造についてなされなかったのを、先生によって綿密に実証的に解明された研究は焔尾を飾るものであります。

□ 寺門に在りては平成十五年梅雲寺第二十四世の法灯を継承し、寺門興隆と檀信徒の教化力は蓮門の龜鑑ともいえます。社会教育の面でも梅雲寺保育園を経営し、幼児教育と地域における社会教育のためにも尽くされた功績は顕著であります。

□ まことに、先生は資性温和にして情に深く人を愛し、徳風は万人に及び、春風の如き人柄でした。
□ ここに深いご縁をいただきながら、遺稿刊行の辞を述べることに、感無量のものがあり、今はただ法楽自在にしてすみやかに還来して生前のごとく人々を度せんことを念じ、思い出と共に一言述べて辞といたします。
(「刊行を欣び、先生を偲んで」より抜粋)

星野 英紀

大正大学元学長・日本宗教学会元会長

□ 鷲見さんが平成二十二年二月十九日に急逝し、その数日後にご自坊で納棺の儀が執り行われた。その時、法嗣の鷲見宗信師が二冊の書物をご遺体に添えるように納められた。私の記憶に間違いがなければ一冊は宮本常一『忘れられた日本人』であり、いま一冊は青い表紙の『浄土宗海外開教のあゆみ』（浄土宗海外開教のあゆみ 編集委員会編（浄土宗開教振興会、一九九〇））であった。

□ 宮本常一は、一年中日本の村々を自ら歩いて民俗探訪に終始した。鷲見さんが、晩年になっても新たに沖繩をフィールドとして多忙の中を一年に何度も出かけていたのを私は聞いていた。やはり現場を探訪することに終生強い意欲を持っていたということであろう。

□ さて、もう一方の書物『浄土宗海外開教のあゆみ』の内容は、戦前の浄土宗の海外布教全体に関する基礎資料がその中心となっている。一九八〇年以降から鷲見さんが特に関心を持った分野がこの浄土宗の海外開教である。日本の伝統仏教のなかでは、ハワイ開教を開始したのは浄土宗が最も古い。ホノルルの市街地に別院を持ち、各島に沢山の浄土宗寺院がある。一九八〇年頃、大正大学

がハワイ大学と交流協定を結び、ハワイとの関係も緊密になった。ハワイ大学との研究者交流も始まった。加えてこの時期は日本宗教学の海外展開への関心が学会でも広がったところで、故柳川啓一東大教授、森岡清美元東京教育大学教授をヘッドとした調査チームが結成され、仏教だけでなく神道、新宗教の海外布教に関する実態調査も行われていた。

□ 戦前の日本仏教がもっとも活発に開教活動を行っていたのは、日本が植民地化した東アジア方面および東南アジアであり、また南洋諸島であった。それらのほとんどは日本敗戦の結果、現在は足跡をたどることさえ不可能になっているので、そのデータ収集は大変困難であったと容易に想像できる。しかし鷲見さんは苦勞をいとわず、残された断片的な資料の集積および当時を知る関係者の聞き取りなどを精力的に行なった。こうした結果が『浄土宗海外開教のあゆみ』となって広瀬卓爾氏との共編という形で一九九〇年に刊行された。近代浄土宗宗団における海外開教の全貌が網羅されており、浄土宗としては大変貴重な書物であることは疑いない。(「あとがき」より抜粋)

本書を推薦します (順不同・敬称略)

石上 善應 大正大学名誉教授

伊藤 唯眞 浄土門主・総本山知恩院門跡
佛教学会名誉教授

桂 大瀛 前浄土宗宗議会議員

島蘭 進 東京大学大学院教授

井上 順孝 国学院大学教授

池上 良正 駒澤大学教授

岡本 宣丈 浄土宗文化局長

小澤 憲珠 大正大学名誉教授

高橋 弘次 大本山金戒光明寺法主
佛教学会名誉教授

多田 孝文 大正大学学長

圭室 文雄 日本近代仏教史研究会々長
明治大学名誉教授

中井 真孝 佛教学会理事
佛教学会名誉教授

中野 正明 京都華頂大学学長

広瀬 卓爾 佛教学会教授

福原 隆善 前佛教学会学長
仏教学会教授

藤本 浄彦 浄土宗総合研究所所長
仏教学会教授

星野 英紀 大正大学元学長
日本宗教学会元会長

水谷 幸正 佛教学会名誉教授

宮林 昭彦 大本山光明寺法主

佐々木宏幹 駒澤大学名誉教授

奈良 康明 駒澤大学名誉教授